

「この仏像に尋ねたい」

中 林 幸 夫

(会員・佐伯市長島町)

佐伯史談、第一六五号(前号)の「中世佐伯荘(宮下良明氏)を拝読して、「中世庶民のほとんどが文字には縁がうすく自ら書き残すことが出来ず一生を終えた」と云々して、佐伯地方には中世佐伯地方の文献がないため佐伯荘を知るには、残存する古代石造遺物や神社仏閣等の遺産から研究することが可能ではないかとの意見に關して、賛同するとともにそれ以外に方法はないように思い、宮下氏があげられている「檜野永福庵の仏像」について私考を述べてみたい。

佐伯市のはずれ、番匠川を挟んだ梅牟礼城の対岸に檜野という小集落がある。

現在は檜野橋(昭和四十年架橋)があるため、佐伯市

の街にも近いが、檜野橋の無かった時代は、川があるため人里離れた孤立の集落で、現在も三五軒の集落であるが、その中の二四軒が今山姓であり、今山一族の感じさえする。

この地域は三方山に囲まれ、一方が川で、その中央に慈濟院と呼ばれる小さな古い庵があり、これを地域の人達が守っている。

古い庵は、さほど珍しいものではないが、庵の中に鎮座している仏像は驚くほど古いものである。

庵をお守りしている方が仏像に彫まれている年号は「正暦元年」で今から遡ること一〇〇〇年以前とのことと話された。

そして、庵改築時に記録したと云う木札を見せてくれた。

木札には

当庵新築年号、昭和七年四月拾七日棟上

本尊、阿弥陀仏

正暦元年寅一月仏日 恵心僧 都作

地藏堂建立年号、 文政元年寅十二月二拾三日

檜野邑

地目付

兵太馬

と書かれている。

大工 基蔵
木引 利吉



この仏像がこの地にどのような変遷を経て鎮座したかの由来は不詳とのことである。

そこで、正暦元年について調べると第六六代一条天皇の時代で西暦九九〇年である。

西暦九九〇年といえは、慶長六年（一六〇一年）に毛利高政が佐伯藩主として入封した時より約六〇〇年前に

なる。

母牟礼城主 佐伯惟治の時代
豊後国王 大友宗麟の時代

頃からの佐伯地方に関する史実の記録は多く見られるが、西暦一〇〇〇年以前となると少なくてなか／＼実像を掴むことができない。



佐伯地方の寺の創建は毛利藩になってからのものが多いが、古くは、佐伯惟真に関係ある龍護寺の創建は正治年間（一一二〇年頃）緒方惟栄の臣、山本源太有明が僧となり草庵を造つたと伝えられており、草庵には、



千手観音仏を安置したとのこと
で、仏像は大坂で作られ作者は安阿弥と伝えられている。

樫野の阿弥陀仏は、正暦元年作を信じれば龍護寺のものより約二〇〇年も古いことになり、この地方では最も古い仏像とい

うことになる。
そこで、正暦年間の時代背景を調べて見ると都は京都平安宮におき一条天皇で、紫式部、清少納言、和泉式部、等が輩出して、枕草子や多くの和歌が残され、仏教面でも発展をきわめ、平安時代の文化は、平穩なこの一条朝において頂点に達したとされている。

しかし、一条天皇は、内裏の運が悪く、長保元年（九九九年）に一度炎上、長保三年（一〇〇一年）に新造された内裏が再び焼失、寛弘二年（一〇〇五年）更に三度目の火災を起し、翌三年、内裏は再建されたが、天皇は縁起が悪いと内裏に遷幸しようともされず、播磨介、佐伯公行が献上した一条院（一条大路南、大宮大路東）を専ら御所とされるようになった。（源氏物語に記録があるとのこと）

そこで、樫野の仏像のことについて考えると、大仏建立から各地に国分寺を置く等、仏教的信仰支配をもって、まつりごとを行ってきた天皇政権の時代背景を考えると、佐伯地方に於いても、佐伯院が置かれたと同時代に地方の人々の民心を強く引きつけるための寺院建立があり、仏像はそこに祀られていたものに関係しないだろうか、一条朝時代の作であれば、一条天皇は仏教に強く関心を持ち自らも出家しており、仏像を地方に配った可能性はありはしないか。

藤原純友の承平、天慶の乱の天慶四年（九四一年）の記録に、佐伯院とか佐伯是基の名があることから年代的に符号しないだろうか。

それと、平成元年、佐伯市教育委員会発行「佐伯氏族の興亡」の中に記載されている、延岡市に所在する銅製、鰐口に

(右)、佐伯庄 宝光寺鎮守奉施入金鑿

(中)、満天宮

(左)、応永廿一年甲午十〇月八日讃岐守大神惟世

(註) 応永廿一年は一四一四年)

の記入があることと、解説文の「宝光寺が佐伯荘のどこにあったか寺を知る史料はないが、施入者が惟世とあることからすれば、古市の近くにあった菩提寺という可能性が考えられる。満天宮の存在史料は皆無」(原文のまま、)

私はこの満天宮は、櫻野の永福庵に隣接して現存する天満宮と思われるしかなかったが、

櫻野には古い五輪塔等が残存することから宝光寺があつても不思議でなく、ひよっとすると佐伯院の所在地だったかも知れない。

佐伯院の呼名が消えたのは、その後何百年にわたつて付近の地名が、稲垣、上岡、古市、櫻野邑等と呼ばれてきたために、佐伯の名前は消滅したとも思われる。

橋のない昔にかえつて考えてみると、梅牟礼城築城前、城のあつた堅田地方と、古代の道小野市(宇目町)―三重市(三重町)を結ぶ接点の地域になることから佐伯院があつてもおかしくはないだろう。

近くの、提内川と番匠川の名も関係しないか、番匠の名の起りは匠(大工)が住んでいたからというのはこじつけではない、番じょうは役所があつた番所、番処である方が説得力がある。

佐伯の称の記録に

「三〇代敏達天皇の十三年九月、鹿深の臣、佐伯の連自が百済に至り仏像一体を齊して帰る、蘇我の馬子、殿を造り之を置」とあり、佐伯氏はもとく百済系の渡来人であつたように思われる。

英語、仏語など欧州の言語には共通部分が多いが、日本語、朝鮮語、中国語は発音上、全く異なる言語であるのに、当時渡航した人々が言葉の困難を表現していないのは渡来人を先祖に持つか、なんらかの下地があつたのではないだろうか。

昔、多くの新羅しんら、百済くだらの渡来人を朝廷が重要な役職に任じたといわれているのは、彼等が日本に無かつた文字

や仏教文化を持つていたからであろう。

弘法大師も佐伯氏であり、一条天皇に居館を献上した播磨介、佐伯公行や、さきに豊後守となった佐伯久良麻呂等は同じ流れをくむものと思われる。

書物によれば「佐伯」の語源は「サエキ」「塞^{サエ}ぎる」から出ているとか、エゾを統轄した職種が「佐伯部」であつたとか述べられているが、私はサエキのサはセに近い音で朝鮮語の西(仕)を意味するのではないかと思つている。さすれば、サエキは西方の者になりはしないか。佐伯はサエキの発音に後で文字を入れたもので、人扁としたことは智者のなせるわざと感心する。

佐||左、左右の方角

伯||白、城は古くは武士がいた処か朝鮮の役で記録に

ある白村江の白

と愚考すると、西方から来た武士団又は朝鮮系氏族を佐伯氏と呼んだかもしれない。

(佐多岬は西につきでた岬と考えると愚考も遠からずと思えてくる)

とにかく仏像が何かを語つてくれることを期待するばかりである。

菜の花や 阿弥陀は語る 顔をして

幸夫

